

聖なる水の湧きたつところ

橋本裕之

一 芸能・空間・他界

二 奈良から若狭へ

三 常世の国

四 他界とは何か

論文要旨

本稿はじつのところ、春日若宮おん祭について論述した前稿の延長線上に位置している。前稿ではおん祭の祭礼空間で演じられる芸能が他界としての春日を体現するものとして観念されていたのではないかという視座が得られたが、その結果としてつぎのような課題が生じてきた。すなわち、芸能が他界として春日を体現するものであったとしても、そこには名状しがたいさらなる他界がすべりこんでいるのではないか、という問いである。

そこで本稿では、空間的な視野をひろく設定して、奈良から観念された、さらなる他界としての若狭に注目している。具体的には東大寺修二会における「お水取り」の民俗的背景と八百比丘尼の伝説に注目することによって、若狭が聖なる水の湧きたつところ、つまり不老不死が実現される國として觀念されていた消息を明らかにしたのである。

こうした觀念は、いまでもなく、若狭に堆積している歴史的記憶の産物であるように思われる。しかしながら、本稿では歴史的な説明に対して不関与の態度をとつて、若狭に伝承されている王の舞を対象にしながら、芸能に体

現される他界の所在をつきとめようとした。ところが、王の舞によつて体现される他界は「海上の道」につらなるのみならず、反転して再び奈良や京都にもとめられている。かくも錯綜した構図のうちにあらわれる他界とは、「見る／見られる」関係から生み出された非在の空間にはかならない。そのため、やはり「見る／見られる」関係によつてかたちづくられる芸能にも読みこまれるのである。

それでは、他界という觀念によつても説明されない暴力としての芸能は、はたしていかなる空間に定位されるべきものなのだろうか。名状しがたいもうひとつのお界。それは若狭という空間には収斂されない、「聖なる水の湧きたつところ」なのかもしない。しかしながら、このよだな空間を記述することばは、いまのところ誰にもみつかっていない。